アラン・ウィリアムズ

アメリカ・カナダ大学連合 日本研究センター、2017-2018年度、2018年6月

「カラーラインの中のカラーライン」：W.E.B.デュボイスの視点からみた太平洋における人種

　アフリカ系アメリカ人の歴史家でもあり社会運動家でもあるデュボイスは、1945年の日本帝国の降伏まで日本を強固に支持しました。植民地化された人より植民地化する人を支持したという彼の判断は人種に関する考え方のためだと指摘されています。その原因は、彼が「本質的な人種」を信じていたからだとされています。デュボイスは日本帝国のアジア主義、すなわち、満州国における五族協和の政策と大東亜共栄圏全体を人種差別的だと見なすことができず、東アジアが「アジアの人種」が解放される場所でもあり、さらにアフリカ人の解放にもつながる場所でもあるかもしれないという根拠のない希望を抱いたのです。

　本日、私が指摘したいのは、デュボイスは1945年に日本帝国の対策を批判したことです。彼は「日本の『優れた』人種の下でのアジアのカースト制度は西洋の搾取の代わりに受け入られない交換だった」と言いました。なぜデュボイスは日本帝国が暴力的だと分かっていても支持したのでしょうか。私は二つの要因とデュボイスの日本への疑問を説明したいと思います。

　一つ目の要因は日中同盟という夢から始まります。デュボイスは西洋の植民地化に対して「自然な友達、不自然な敵」という日中関係を提唱した孫文の人生に興味がありました。デュボイスは1930年代の内戦中の中国では西洋の貪欲さを防げない、一方で日本は「有色」の世界で西洋の不平等条約の制度や治外法権の乱用を防げる唯一の国だと信じ、日本主導の東アジアを消極的に受け入れました。強力な日本主導の東アジアがソ連や、インド、アフリカ諸国と独立運動でのつながりを築くなら、白人によって作り出された四世紀にわたる世界を倒すことのできる有色人種の地域になるだろうと想像しました。また、デュボイスは日本が「19世紀にヨーロッパによる奴隷制度から世界を救った」こと、および「20世紀に資本による奴隷制度から世界を救う責任がある」ということを理解していました。1930年代の他の選択肢はソ連のコミンテルンやインドと韓国独立運動などという一種の新たな国際主義のみでした。しかし、その動きでは力が不十分だとデュボイスは評価し、日本を支持したのです。

　戦後、日本は人種差別化された資本を維持し、「世界を救う」ことに失敗し、アメリカの冷戦を黙認したので、デュボイスは毛沢東主義の中国を次の実現可能な候補者と考え、支持し始めました。

　二つ目の要因は、デュボイスは第一次世界大戦以降、アメリカのウィルソン大統領の発言を疑問視したことです。ウィルソン大統領の「民族自決、民主主義と自由な資本移動のために世界を安全にする」という発言に対して、デュボイスは「グローバルな白人至上主義におけるパラダイムシフトを表す」とみなしました。1936年に、デュボイスは日本の植民地主義に対する「二つの一致しない白人の警戒」について書きました。一つは西洋の「白人支配を覆さないように日本の資本主義の崩壊を求め、西洋の帝国が有色人を搾取することに基づいた白人の経済反応」でした。もう一つは、アメリカの「伝統的な帝国が完全に崩壊するように日本の資本主義の崩壊を求める白人の経済改革」でした。この二つは真逆の理由で日本の資本主義の崩壊を支持します。この白人の世界における結論の一致はカラーラインの証拠なのです。西洋とアメリカは反植民主義という概念をプロパガンダの武器として使いました。当時、日本も「西欧は人種差別的だ」という概念を武器として使いました。ですが、デュボイスは「アジアはアジア人のためのものだ」と考えていたこと、従来型の帝国性とウィルソン主義は止めようがないと信じていたことから、日本帝国はアジアへの西洋の侵害を阻止できる最良の主導者だとみなしました。以上が二つ目の要因です。

しかしながら、同時にデュボイスは日本への疑問を抱いていました。1928年に、アジアやアフリカにおける植民地主義からの解放をテーマにした小説『黒い王女』を出版しました。その小説の中で「カラーラインの中のカラーライン」 という言葉を使いました。小説の筋は、 インド人の王女と日本人の男性の貴族が汎アジア同盟を導きますが、アフリカ系アメリカ人の主人公を同盟に参加させません。「カラーラインの中のカラーライン」 とは白人至上主義以外の人種至上主義を反映しているのです。小説では白人至上主義を打破しようとするアフリカ・アジア同盟は成功裏に終わりますが、「カラーラインの中のカラーライン」は消えず、新しい人種至上主義が定着する可能性を示唆しています。

以上見てきたように、デュボイスは日本帝国を公的に支持しましたが、彼が疑いを抱いていたという側面は忘れてはなりません。学者たちが冷戦後のアメリカの衰退と21世紀のアジアの台頭を考慮するとき、デュボイスの考えは意義を持つと思います。以上です。ご清聴、ありがとうございました。